

氏名（ふりがな）：景山 清美（かげやま きよみ）

研究科・専攻：神学研究科・神学専攻

題：宗教の分化状況における宥和作用——「諸宗教の神学」と聖霊——

要約：主著『現象としての人間』に表われるシャルダンの宇宙観は、「人格的な宇宙」と「物理的な宇宙」を対比し、「人格的なエネルギー」が「物理的な宇宙」において収斂運動を起こさせるといふものである。この「人格的なエネルギー」はシャルダンの理論の要点であり、万物の収斂運動が向かう極である「オメガ点」から放出されると考えられている。シャルダンの地球観によると、地球は、このエネルギーの働きかけにより「超創造」が起き、「オメガ点」に向かって収斂する最中にある。また、シャルダンの人間観によると、人間は、思考力を有する存在に特有のものである「信仰」によって、オメガ点である受肉のキリストのエネルギーを受け、「超創造」による地球の変容を進行させる。人類が発生以来、一度は分化しながら、今日に至るまで一つの種として保たれているのは、この「人格的なエネルギー」の結合作用のためである。

以上のシャルダンの基本的な思想を踏まえ、地球上に存する宗教の分化状況を前に、諸宗教を収斂に向かわせる方法の一つとして、「諸宗教の神学」に焦点を当てる。特に、神の普遍的救済意志の表われとして宗教の境界を越えて働く聖霊の作用を、「宇宙を神につれ戻すエネルギー」と相通じるものと見做し、「諸宗教の神学」が聖霊の働きを究明することに、シャルダンが構想した「精神のエネルギー論」の成立を推進する可能性を見出す。そして、「科学の人間時代」に向けて、科学と「諸宗教の神学」が協働することの意義を述べる。

1. テイヤール・ド・シャルダンの基本思想

シャルダンによると、現象としての人間の研究が到達する頂点は「精神の収斂の発見」である¹。この、収斂運動がいかんにして起きるかが、主著『現象としての人間』では論じられている。

拡散している分子を結合する動きを考えるに当たり、シャルダンは、収斂に向けて宇宙を動かす「人格的なエネルギー」に着目した。『現象としての人間』では、エネルギーを物理的なものと精神的なものに分けて考えており、シャルダン独自の宇宙観として、「人格的な宇宙」を「物理的な宇宙」と対比させる。

三次元の物理的な宇宙は、エントロピーの法則のもと、拡散する性質を持ち、この運動方向が逆になることはない。これは通常の宇宙観である。これに対しシャルダンは、四次元の精神的な宇宙を想定し、この人格的な宇宙が三次元宇宙を包含していると考える。そして、この四次元宇宙は必然的に収斂する性質を持ち、地球上に存在する分子を融合に向かわせる作用を及ぼすと考えた。²

シャルダンの理論の焦点である、この収斂を引き起こす「人格的なエネルギー」は「内的エネルギー」とも呼ばれ、「地球上の思考する粒子全体の精神的一致を生み出し、維持する」力である³。

もちろん、こうした「一致を生み出す」動きは、通常、自然状態では、地球上で生じるものではない。こうした、エントロピーの法則に反する動きが起きるのは、物理的な地球を超えた次元の作用のゆえである。

三次元の地球を包摂する四次元の層を、シャルダンは「精神圏」⁴と呼ぶ。この層をシャルダンは「思考力をそなえた層」とも呼び、地球上の思考力を有するすべての分子は、この層の持つ、大合成を行なう巨大な作用に従っている⁵。そのため、人類という系統を取り巻くこの層の精神作用は、思考力を有する分子である人類に及び、「凝集と癒着合成という驚くべき力」をもたらす⁶。そのため、人類は、思考力の発生によって、いったんは分化に向かうが、「思考力をそなえた層」が人類の生活に与える併合力によって、ひとたび分枝したのち、再び互いに結合し、収斂運動に従属するようになるのである⁷。

この、地球上の個体を融合させるよう働きかけるのが「人格的なエネルギー」である。

1 『現象としての人間』 p. 205

2 同上 p. 310

3 同上 p. 324

4 「精神圏」とは、生物学の系統分類学において、地球を包む生命の層とされる「生物圏」の概念と対比したシャルダンの造語であり、人間の思考活動によって地球にもたらされた、地球を覆う「考える被膜」である (G・ベーム「ピエール・テイヤール・ド・シャルダン」 p. 439 参照)。

5 『現象としての人間』 p. 290

6 同上 p. 205

7 同上 p. 288

これは、精神の層が一つに融合される究極の一点である「オメガ点」から放射される⁸。「オメガ点」⁹とは、四次元的人格な宇宙に存在するとしてシャルダンが提唱した概念であり、物理的に観測できるわけではないが、シャルダンの理論によると、宇宙の中でエントロピーの法則から逃れ、その法則からますます遠ざかっている極である。¹⁰

人間が、エントロピーの法則から離脱し、拡散から収斂に向かうには、オメガ点に立ち帰る必要がある¹¹。そして、ここがシャルダンの神学の骨子であるが、このオメガ点とは受肉したキリストであり、宇宙が神の元に戻る収斂はキリストの受肉によって起きる。それは、次の文に端的に表われている。

「キリスト自体は無力な受動的な収斂の点として働くのではなく、その人間たることをとおして、宇宙を神につれ戻すエネルギーの輻射の中心となる。」¹²

ロゴスとしてのキリストは、肉体としての人間の物理的な次元に触れることのない不可視の存在だが、受肉したキリストは、物質と精神の仲介者となって、三次元の地球と人類を神のもとに収斂させる。シャルダンは、キリストを「宇宙生命力の原理」であると言う。それは、神と世界を一体化させ、神のもとに万物を収斂させるよう、進化の動きを司り、活気づける働きをキリストが為していることを意味する。この宇宙の統合と昇華の働きをキリストが行なうことは、キリストが受肉によって人間の世界に人間として表われ、地球の精神的な作用全体と結び付いたことで可能となった。かくしてシャルダンは、「キリストはすべてを結集し、すべてを変容させる」¹³と言う。

シャルダンは、キリストによる万物の変容を「超創造」¹⁴と呼ぶ。これは、最初の天地創造、ビッグバンと人類の発生に次ぐ第二の創造であり、進化の終極、神学的に言うと終末

⁸ 同上 p. 310

⁹ 『神学的人間論入門』 p. 112 には、「『Ω点』が人類と宇宙進化の最終的な到達点であり、そこに向けて招く創造的な愛の力がすべてのうちに働いている」とある。

¹⁰ 『現象としての人間』 p. 325-327。また、同箇所によると、オメガ点は、進化を構成する系列の最後のものでありながら、その系列を越え、物理的な宇宙の時間と空間の外に位置しているため、時間軸のいずれかの時点で崩壊する有限のものとは異なり、不滅性を持つ。

¹¹ 同上 p. 328

¹² 『神のくに』 p. 116

¹³ 『現象としての人間』 p. 357

¹⁴ 『神のくに』 p. 127。同箇所を参照にすると、「超創造」は、キリストが聖化の恩寵によって被造物に超生気を与えることで、三次元の宇宙と、その中に内包される地球と人類が変容し、新しい大地と新しい天を造り出す出来事である。

また、『神学的人間論入門』によると、新約聖書には「キリストこそが創造の『初め』と『終わり』を一つに結ぶ根源」とする見方が見られ、イエス・キリストの到来により「新創造」がこの世にすでに開始され、しかもそれはイエス・キリストの再臨において最終的な完成に至るとされる。シャルダンのキリスト中心的創造論は、こうした「宇宙的キリスト論」の見方を現代人の問題として再構成したものであり、宇宙は、キリストの受肉において、進化の最終段階である創造の「キリスト化」のプロセスに入っているとされる。(『神学的人間論入門』 pp. 126-129 参照)

の完成に至る動きである¹⁵。キリスト教の創造神学は目的論の立場に立ち、世界や生命は偶然に生じたのではなく神によって創造され、神との一致という目的を持つと考えるが、「超創造」とは、まさに創造論を科学的に説明することを試みた理論である¹⁶。

地球と人類の進化が完成に向かっているという世界観は、自然科学からすれば、非現実的な仮説と思われるかもしれない。ただ、シャルダンの言う宇宙の変容は、四次元の精神的な宇宙からの働きかけである以上、人間の信仰の影響下で起きる現象であり、その変容は、宇宙が物理的に何か別の物になるのではなく、「宇宙は外面的にその特性を変えることなく、さらに生気をあたえられ、超生命化されうるものとなる」¹⁷という仕方で起きる¹⁸。この、人間の信仰を媒介とした超創造は、シャルダンの人間観の要点である。

信仰とは人間だけが持つものだが、この信仰を介して、三次元の宇宙にキリストのエネルギーが及び、宇宙の「キリスト化」¹⁹が進む。三次元と四次元の宇宙を仲介する人間という見方は、神の創造計画の中で、進化において特別な役割を果たす存在として人間を位置付けたシャルダン独自の人間観である。

こうした世界観に基づいて、シャルダンは「科学の人間時代」²⁰という言葉を用い、今後、科学と宗教が協力して、世界を完成に向けて収斂させる「結合の法則」²¹について研究すべだと訴える。21世紀以降、人類が向かう方向を模索する中で、三次元の物理的な宇宙だけを対象とする科学では、もはや限界が来ている。そのため、シャルダンは、「人格的な宇宙」という宇宙観に基づく新エネルギー論として「精神のエネルギー論」を構想し、「宇宙を神に連れ戻すエネルギー」について解明する必要性を示唆している²²。

また、シャルダンは、科学が人間に集中し、宗教と向き合うに際し、科学にとってのキリスト教の重要性を指摘する。それは、キリスト教が、宇宙が人格的なエネルギーに支配されていることを証しており²³、「宇宙はどこに向かうのか？」の問いに「キリストによっ

¹⁵ シャルダンは、収斂に向かう動きに関し、「宇宙は神のために統一されるが、ただそれはその完成の終局の中心においてのみ、到達しうる」（神のくに p. 111）と述べている。

¹⁶ カテキズムの「世界はなぜ創造されたのですか」という問いには、「創造の究極目的は、神がご自分の栄光とわたしたちの幸福のために、キリストのうちに『すべてにおいてすべて』（一コリ 15・28）となられること」とある（CCC53）。また、シャルダンは、「世界を創造し、完成し、浄化することは、神にとって世界を自己に有機的に結びつけ自己と一体にすること」（p. 357）と述べている。

¹⁷ 『神のくに』 p. 134

¹⁸ 同上 p. 126 には、「神的なるものの発現は事物の外観の秩序を変えない」のであり、「事物の内奥の変容として現われる」とある。

¹⁹ 同上 p. 116

²⁰ 『現象としての人間』 p. 339

²¹ 同上 p. 358

²² 同上 p. 351

こうした収斂運動は、何もしなくても自動的に実現するわけではない。三次元宇宙に生存する以上、自然状態では、エントロピーの法則によって分化に向かう動きの方が強いため、収斂を実現しようとするれば、人類は自ら結合に向かう努力をする必要がある。シャルダンは、そのため、「人間という単子（モノイド）同士の協力が生まれるためには、われわれの科学をその極限まで延長しなければならない」と言う（『現象としての人間』 p. 322）。

²³ 同上 p. 354-355

て神の御許に向かう」と答えるのをその本質とするためである²⁴。

人格的なエネルギーの究明においては、科学が宗教の提示する宇宙観を受け入れる必要があるが、同時に、宗教の側も、科学の視点に立ち、科学の進歩に寄与する姿勢が必要であり、双方の相互協力が、人類の未来にとって重要となることが、シャルダンの提言から伺える²⁵。

2. 収斂運動に関する考察

2-1. 人類の分化と結合

ここで、シャルダンの基本思想を踏まえ、人類の分化と結合がどのように起きるかを考察する。

人間は、身体的には動物としての面を持つと同時に、思考力という精神機能をも持つ二重存在である。そのため、分化に向かう作用と結合に向かう作用の両方に引っ張られている。進化には、「系統はそれぞれ精神機能に満たされて行けば行くほど、〈顆粒状になる〉傾向がいっそう増す」²⁶という法則があるため、人間という分子は、この進化の方向性に従うまま、最初、動物学的な分岐、個体化に向かう²⁷。

人類において個体化とは個性化と言い換えてもよいが、人間という分子は、思考力を持ったことで、他の分子からできるだけ遠ざかろうと努めるようになり、個性化が進んだ。そして、この個性化の動きは、世界を多の状態に陥らせた。世界が現在、分散の状態にあるのは、人間の持つこの個性化の動きのためである。²⁸

その結果、人類は、人種などの自然的な単位だけではなく、人種、国民、国家、祖国、文化といった人為的な単位でも細分されている。²⁹

しかし、人類は、個性化による細分化の結果、別々の種に分かれたわけではない。こうした多様な分枝は、「別の原始的系統であれば、久しい前から異なった種に分離されているはずの分布条件」である。にもかかわらず、人類が一つの種として保たれているのは、「人類の輪生が、つねに共通の繊維組織のなかで結ばれている」ためである。³⁰

この共通の繊維組織とは、地球を覆う「思考力をそなえた層」であり、地球を取り巻くこの層の及ぼす結合に向かう作用が、求心的旋回運動となって、地球の表面で個体同士の

²⁴ 『神のくに』 p. 114。また、シャルダンは『現象としての人間』で、「宇宙的な信仰と希望」(p. 356)がキリスト教の「秘義」なのであり、「宇宙生命力の原理であるキリスト」(P.357)について証するのは、キリスト教の使命であると言う。

²⁵ 『神のくに』 p. 160には、「信仰うすき人々よ。なにゆえ世界の進歩を恐れたり、進歩をかこつのか。キリストのためにすべてを試みよ。[中略]それこそまさに反対に、真のキリスト教的態度である」とある。

²⁶ 『現象としての人間』 p. 200

²⁷ 同上 p. 204

²⁸ 同上 p. 316

²⁹ 同上 p. 203

³⁰ 同上 p. 287

融合と分枝同士の融合を引き起こす³¹。この収斂運動によって個々の分子が結合に向かう動きを、シャルダンが「人格化」と呼び、分化に向かう「個性化」と対比させた³²。

思考する粒子同士の接近、個人単位の統合と民族や人種単位の統合が、地球の球形と精神の宇宙的収斂という二つの曲率の結合した作用から生まれることは、まさに進化の新しい領域である³³。

2-2. 結合を及ぼす作用の一つとしての諸宗教の神学

分化と結合の作用が交錯しながら影響を及ぼし合うフィールドとして地球を見ると、キリスト教もまた、拡散し、分化する方向に向かう歴史であったと言える。

パウロ書簡に、「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか」（一コリ 1・13）、「主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、すべてのものの父である神は唯一」（エフェソ 4・5-6）とあるように、キリストの教会は本来、分裂しないことが望ましいとされていた。それは、13世紀においても、第4ラテラン公会議で、「信者の普遍的教会は一つであり、その外においては唯一人として救われない」（DS802）と宣言され、確認されている。しかし、周知の通り、キリスト教は、東西教会に分かれ、西方教会もカトリックとプロテスタントに分かれ、今日に至るまで、数々の宗派が形成されて来た。そして、16世紀のフランスにおけるユグノー戦争のように、異なる宗派間で繰り返し対立が生じた。

また、キリスト教だけではなく、宗教そのものが、有史以来、次々に新たに興され、宗教間での衝突もたびたび起きた³⁴。宗教がない方が世界は平和なのではないかという見方もされるほど、宗教はまさに *divergence* の状態にあり、シャルダンの言葉を借りると、まさに三次元宇宙のエントロピーの法則の支配下にあり、精神的なエネルギーによって物理法則を脱することがまだできていない状態ということになる。

キリスト教会においては、自らが正統な信仰を持つ唯一の宗教であることを主張し、他の宗教やキリスト教の他宗派を否定する傾向があった。例えば、ローマ・カトリックの19世紀の第一バチカン公会議の教義憲章『*Dei Filius*』には、「カトリック教会だけが、神によって啓示された数多くのすばらしいキリスト教信仰の確実な証拠を持っている」（DS3013）とある。このように、「カトリック教会に所属するキリスト者だけが救われる」という救済観が長らくの間打ち出されて来た。

しかし、20世紀に入り、カトリック教会以外の宗派や宗教が数多く存在する宗教の多元

³¹ 同上 p. 289。この作用は、内部にむかって集中する地球の高まる圧力が、人間分子の間に眠っている多量の牽引エネルギーを爆発させ、人間という単子（モノド）同士の協力を生じさせるというプロセスをたどる（同上 p. 322）

³² 同上 p. 316

³³ 同上 p. 347-348

³⁴ 例えば、キリスト教とイスラム教の間で、古くは、11世紀から13世紀にかけての十字軍や、8世紀から15世紀にかけてのイベリア半島でのレコンキスタといった、一種の宗教間の勢力争いが行なわれた。また、現代においても、ヒンドゥー教とイスラム教間で続いているインドとパキスタンの対立や、イスラエル建国を機に生じたユダヤ教とイスラム教間のパレスチナ紛争など、枚挙に暇がない。

的狀況を前に、キリスト教会内でのエキュメニズム運動や、諸宗教の神学における宗教間の対話が試みられるようになった。これは、第二バチカン公会議の『教会憲章』に「福音をまだ受けなかった人々も、いろいろな意味で神の民へ秩序づけられている」(LG16)とあるように、カトリック教会以外の宗教・宗派も神につながっていると見る見方に基づく動きである。公会議の顧問であったK・ラーナーは、「匿名のキリスト者」論で、他宗教の信奉者も本人は無自覚でもキリスト教徒であり、その宗教の信奉を通してキリストの恩恵によって救われていると考えることで、他宗教の救いを認める理論を形成した。

こうした、教会に所属しているか否か、どの宗派の教会に所属しているかに関わらず、キリスト教という境界を越えて神の救いのわざが働いているとする見方の背景にあるのは、神の普遍的救済意志と聖霊論であると考えられる。

神の普遍的救済意志は、回勅『救い主の使命』でも、「救いが普遍的であるということは、救いはキリストを信じている人や教会に属している人にだけ与えられるようなものではない」(RM10)という一文で語られている。また、同回勅は、聖霊論について、他の宗教的伝統の中で育った人々に、神の恵みは「キリストの奉獻の結果として、聖霊によってもたらされ」(RM10)、「彼らを教会の正式な一員とするのではなく、彼らの精神的、物質的な状況に適した方法で光を与える」(RM10)と述べている。特に、聖霊論は本回勅の各所に散見され、たとえば、「アシジで開かれた諸宗教間の集会」(RM29)に言及した箇所では、「どのような祈りであれ、ほんものの祈りであれば、それはすべての人の心の中に神秘的に現存しておられる聖霊に促されたものである」(RM29)と述べ、それぞれの宗教の祈りを肯定する見解を示している。

こうした、神の普遍的救済意志に基づく聖霊の働きは、シャルダンがオメガ点から放出される精神的エネルギーと言うものと同一であると思われる。日本における聖霊論の研究によると、聖霊が普遍的に現存するのは、「聖霊の徹底的自己無化」に基づく「徹底的没個人的受容性」のためである³⁵。聖霊は、自己無化による透明性において、あらゆるものを活かしつつ支えるいのちの場であるため、異なる要素の「同一」性を可能にさせる根拠となり得る³⁶。そのため、宗教や国家といった境界を超えて働くことができるのである。³⁷

人間に境界を乗り越えさせる、こうした不可視の力の作用を、シャルダンは、「臨界面、赤道」を越えることに例えて次のように述べる。「臨界面をまたぎ越すことは実際には拡散から収斂に移行すること」であり、「この線を越えると、赤道を越える場合と同じように、

³⁵ 阿部仲麻呂『風姿素描―「ペルソナ主義的聖霊論」および「場所論的聖霊論」の基底としての「聖霊の徹底的自己無化の姿」(神的善美のケノーシス)を求めて―』p. 74

³⁶ 同上 p. 94

³⁷ シャルダンも、その著書『神のくに』で、神の偏在の知覚を、神から贈られたものとして語っている (p. 128)。偏在とは、神の普遍的な現存である。神は本来、万物を超越する絶対者だが、キリストの受肉の結果、神の無辺性は我々に対して、一切をキリスト化する偏在に変貌した (p. 116)。もちろん、汎神論はキリスト教の信仰と反するが、シャルダンがここで言わんとするのは、人々を宥和させる結合のエネルギーの遍満である。そうした宥和の働きは、万物の完成と調和を望む神の普遍的救済意志から考えて、宇宙に満ち満ちているはずである。

増大し不可逆的になる統合力の中に落ち込むようになる」³⁸。そして、こうした統合に向かう動きの中で、「国や人種の区別を越えて、人類の一体化が進むことは避けられないし、それはすでに進行している」³⁹のである。

これは、聖霊という無形のエネルギーに動かされて、宗教間の対話が進んでいるという今日の諸宗教の神学の状況に対しても説明を与えるものである。

こうした、人類の一体化のビジョンについて、公文書は下記のように述べている。

「互いに張り合って、神の神秘を尊重する心で福音的な諸価値を促進するとき、教会の信者と諸宗教の信奉者は、全人類が歩むように召されている共通の道で同伴者となる。

『神が望んでおられるのは、わたしたちのために神が定めた超越的目的地に向かって互いに同伴し合う兄弟として旅することです』⁴⁰

この「全人類が歩むように召されている共通の道」について究明するのが、諸宗教の神学の役割であると言っても良い。この「共通の道」とは、キリスト教の終末論で言うと、諸民族の上に神の支配が及び、神がすべてにおいてすべてとなることで終末時に到来する「神の国」に至る道である⁴¹。シャルダンもまた、キリストの人性を通して、物理的な宇宙が人格化し、オメガ点に近づくにつれ神化する宇宙の進化過程を、神の国が成長する過程⁴²と捉えている。

神の国の成長とは、シャルダンが、「個人、民族、人種の漸進的な結合によって宇宙のなかに出現させられるはずのまだ名づけられていないもの」⁴³と言い、オメガ点に宇宙が近づく中で現われる「超物質的なもの」と述べるのに通じる。現にシャルダンは、「神のくにが事物の内奥の変容として現われる」⁴⁴と述べ、神の国の成長は物理的な現象ではなく不可視だが、世の人々が認知しなくても秘かに進展するものと考えている。

「神の国」に向かう道の中で諸宗教の信者が協働するという考えは、諸宗教の神学分野において、P・ニッターも提言している。ニッターは、「イエスの告知の最終目的は彼自身ではなく、神の国」⁴⁵であり、「新約聖書の証言から見る限り、イエス自身は教会中心主義でもなく、キリスト中心主義でもない」⁴⁶ことを指摘して、「神の国中心主義」を唱えた。

³⁸ 『現象としての人間』 p. 327-328

³⁹ 同上 p. 335

⁴⁰ 『対話と宣言—諸宗教間の対話とイエス・キリストの福音の宣言をめぐる若干の考察と指針』 p. 69

⁴¹ 『イエス・キリストの履歴』 pp. 75-79 参照

⁴² シャルダンは、「神のくにはわれわれ自身の内部にある。〔中略〕その進歩をさらに知的に助長せんがために、まずわれわれのうちに、ついでわれわれから出発して、世界のなかで神のくにの誕生と成長を観察しよう」(『神のくに』 p. 124) と述べている。

⁴³ 『現象としての人間』 p. 299

⁴⁴ 『神のくに』 p. 126

⁴⁵ 増田裕志『人類の救いの規範としてのイエス・キリスト—多元主義の神学』 p. 82

⁴⁶ 同上 p. 70

これは、『神の国』についてのイエスのメッセージは、実践を通して以外、知ることはできない⁴⁷として「実践」を重視し、神の国の建設に向けて他宗教の信奉者と共に協力することが宗教的多元世界における教会の宣教姿勢であるとする考えである⁴⁸。こうしたニッターの考えを受け、増田氏の論文では、「諸宗教は排斥し合うのではなく、また自己の最終絶対性を主張するのでもなく、対話によって基本的にお互いが受け入れ合い、一緒に成長するようにつとめるべきである」⁴⁹と述べられる。

これに関し、シャルダンが著書『神のくに』で、次のように述べた文章がある。

「神の王国の歴史とはすなわち結合の歴史である。神のくにの全体は選ばれたすべての精神のイエズス・キリストへの合体によって形成される。」⁵⁰

この一文を見ると、シャルダンもまた、神の国を建設する途上において、様々な人々が結び付くことを予見し、また、待望していたと言えよう。

おわりに

人類が **convergence** に向かうためには、宗教間の対立を解消し、諸宗教が宥和することが不可欠である。そのため、諸宗教の神学の進展によって、シャルダンが述べた「全人類が地球の精神的革新において一致団結し、完成されるような方向に対して」⁵¹向かう道が、宗教面において開かれることが望まれる。

そして、シャルダンが、「〈認識の対象〉としての人間こそ自然科学全部門の鍵」であり、これからの科学が「人間科学の時代」と言う時、神学の立場から「信仰者としての人間」を究明する諸宗教の神学からの提言は、有益な示唆に富んだものであるだろうと思われる。何故なら、諸宗教対話とは、「何教か」ということに関わりなく、神を信じ真理を求める人間の信仰と真摯に取り組む試みだからである。信仰という、人間の精神にとって最も根本的な事柄と向き合うこの分野は、「信仰者としての人間」を対象とした、まさに宗教における人間科学と言っても過言ではない。そのため、「物理学、生物学、心理学そのものによって、またそれらをも越えて、人間エネルギー論がわれわれに必要となり、その成立を抑えることができなくなるような方向に向かいつつある」⁵²という文にある、「人間エネルギー論」の成立に取り組む諸学問の中には、諸宗教の神学も入り得ると言える。そういった意味で、諸宗教の神学もまた、人類を収斂に向かわせる方法の一つである。

47 同上 p. 79

48 同上 p. 91

49 同上 p. 67

50 『神のくに』 p. 149

51 『現象としての人間』 p. 291

52 同上 p. 342

例えば、宇宙を神に回帰させる収斂作用を及ぼす精神的なエネルギーについて究明する際、それは本来、素粒子宇宙物理学などの領域かもしれないが、人間の心に働きかけ相互理解や協力をもたらすエネルギーとしての聖霊の働きもまた、考察対象として参考になるのではないか。宗教の相違ではなく、人間の信仰そのものに着目する時、それぞれの信仰に宿る真理と聖霊の働きが見え、教義や様式の違いによる争いを乗り越えていくことができると思われるのである。

シャルダンは、個々の人間や組織のエゴイズムが、「神における宇宙の統一化」を遅延させると述べ、「万物において完成せんとするキリストの宿願」を自己の立場に優越させることの大切さを語っている⁵³。キリスト教の唯一性を主張する宣教姿勢が「エゴイズム」に当たるかどうかは議論の余地があるが、それが他宗教への断罪につながる時、それは、シャルダンが「今日でもなお、またわれわれ人間の間でさえ、生存闘争が行なわれ、適者生存が見られる」⁵⁴と述べた状況に陥り、本節の冒頭で述べた宗教間の争いが今後も続くことになるのではないかと思われる。

諸宗教の神学の進展によって、科学と宗教の結合が進み、シャルダンが理想とした「地球の精神を全人類が一致して建設しようとする行為」⁵⁵にこれからの地球の進化を向かわせる「人間科学」が形成されることを祈念し、本稿の結びとする。⁵⁶

53 『神のくに』 p. 130

54 『現象としての人間』 p. 283

55 同上 p. 302

56 創造における人間の特別な地位が人間と他の動物の「非連続性」にあるとするキリスト教神学の人間観と、人間と他の動物の「連続性」に着目する進化論の人間観は、過去の歴史において往々にして対立して来た。しかし、現今の自然科学は、テイヤール同様、の両面から探求することの必要を自覚している。物質的現実や生命には、数学による記述可能性や DNA、遺伝子コードという精神的內容が形成力として刻印されている…など、現代物理学・生物学には、物質と精神の相互作用、あるいは駆動する力を精神に想定する考察も進んでいる。(『神学的人間論入門』 p. 111)

参考文献

- ・『現象としての人間』（テイヤール・ド・シャルダン著、『テイヤール・ド・シャルダン著作集1』、美田稔訳、みすず書房、1969年）
- ・『神のくに；宇宙讃歌』（テイヤール・ド・シャルダン著、『テイヤール・ド・シャルダン著作集5』、宇佐見英治他訳、みすず書房、1968年）
- ・『神学的人間論入門——神の恵みと人間のまこと』（光延一郎、教友社、2010年）
- ・岩島忠彦『イエス・キリストの履歴』（オリエンズ宗教研究所、2011年）
- ・『カトリック教会のカテキズム要約（コンペンディウム）』（日本カトリック司教協議会常任司教委員会監訳、カトリック中央協議会、2010年）
- ・「風姿素描—「ペルソナ主義的聖霊論」および「場所論的聖霊論」の基底としての「聖霊の徹底的自己無化の姿」（神的善美のケノーシス）を求めて—」（阿部仲麻呂、『カトリック研究』77号、pp. 71-110収録、上智大学神学会、2008年）
- ・「人類の救いの規範としてのイエス・キリスト—多元主義の神学」（増田裕志、『カトリック研究』67号、pp. 59-95収録、上智大学神学会、1998年）
- ・「ピエール・テイヤール・ド・シャルダン」（G・ベーム著、『われわれは「自然」をどう考えてきたか』、pp. 420-439収録、伊坂青司他監訳、どうぶつ社、1998年）
- ・回勅『救い主の使命』（Redemptoris mission、ヨハネ・パウロ2世、日本カトリック宣教研究所訳、カトリック中央協議会、1992年）
- ・『対話と宣言—諸宗教間の対話とイエス・キリストの福音の宣言をめぐる若干の考察と指針』（教皇庁諸宗教評議会・福音宣教省、P・ネメシェギ訳、カトリック中央協議会、1993年）
- ・「教会憲章」（『第2バチカン公会議 公文書全集』、南山大学監修、サンパウロ、1986年、pp. 45-98収録）
- ・『カトリック教会文書資料集：信経および信仰と道徳に関する定義集』（H・デンツィンガー編、A・シェーンメッツァー増補改訂、浜寛五郎訳、エンデルレ書店、2002年）